

University Academic Repository

短期留学プログラム参加者における異文化理解と学習動機付けの変容

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 登志子, 清水, 秀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/353

研究ノート

短期留学プログラム参加者における 異文化理解と学習動機付けの変容

Changes in Students' Attitudes toward Cross-cultural Understanding and Learning
Motivation during the Short Study Abroad Program in the Philippines

木村 登志子
Toshiko C. KIMURA

清水 秀子
Hideko SHIMIZU

<要約>

本稿の目的は、2015年夏に実施されたフィリピン短期語学留学プログラム参加者における異文化理解と学習動機付けの変容について調査分析し考察することである。事前段階、中間過程、事後段階のインタビュー調査、対象者が書いたジャーナル、及び授業観察からのメモ書きを質的に分析した。本学からの参加者7名中、調査対象者は語学力に差のある3名に特化した。言語学習、異文化理解、人々との交流の観点から学習動機付けへの前向きな変容が観察された。個々の違いも明確になったが三人の変容に共通する現象として事前段階の学習動機付けが、中間過程にネガティブなステージを経験した後に前向きな学習動機付けへと変容していく様子が観察された。そして動機付けが固定概念として捉えられるのではなく短期間でも個人の経験を通して流動的に変容する様子が明らかになった。

<キーワード>

短期語学留学、学習動機付け、動機付け、異文化理解、フィリピン

1 はじめに

数年前、日本人海外留学者数が減少し問題となったことは記憶に新しい。OECD加盟国中海外留学者数がワースト2位であった2011年、官民を挙げてどうやって留学者数を増やすか、増やすためにはどうすべきかが論じられ2013年に発足した「日本再興戦略」では2020年までに日本人留学生を6万人（2010年）から12万人へ倍増する目標を掲げた。2014年は短期留学を中心に留学者が増加したが目標値には届かない¹⁾。文部科学省が2014年10月に発表した「5つの提言」においても急速に進むグローバル化の中で、国際共通語として英語力の

一層の充実は国家にとって「不可欠」であり、異文化理解や異文化コミュニケーションは「ますます重要になる」としている。英語力の向上、及び異文化理解、異文化交流において、「日本で同じことを経験するには長い時間がかかるであろうことをほんの数週間から1年で経験させてくれる、濃縮された生活体験」が短期留学である（塩澤・吉川・石川、2010）。この情勢において最近増加している短期留学の動機付け研究は意義があると思われる。

留学の何の要素が言語習得に影響しているのかという課題については圧倒的な言語に接触する機会、つまりインプットとアウトプットの量は歴然であるがそれに加えてその内容が問われる。外国語学習そのものが異文化理解である英語教育において、百聞は一見に如かずと言われる通り、留学プログラムに参加した学生は様々な異文化経験をする。短期留学の動機付けを調査するにあたり、ケース・スタディとして本学の短期留学プログラムに参加した学生の異文化理解と動機付けの変容を研究した。以下、調査した短期プログラムの概要と特徴を述べる。

1.1 本学プログラムの概要と特徴

嘉悦大学では選択科目としてフィリピン・セブ島への短期語学留学²⁾を行っており、毎年約10名の学生が参加している。プログラムは事前研修3日間と現地研修約2週間、研修後の課題提出で構成されている（資料1及び資料2参照）。

留学中のプログラムは英語レッスンの他にチームビルディング、現地視察、スラム街訪問、児童養護施設訪問、自然体験（資料3参照）などによって構成される。その中でも現地学生、児童養護施設の子供たちとのスポーツ・フェスティバル（資料4）、及びジャパン・フェスティバルと呼ばれる日本文化を紹介するプロジェクト（資料5）が特徴的である³⁾。前者ではダンスやスポーツを通じて現地の学生や講師とコミュニケーションを高めながら同じ経験を共有する。後者はいわばマネジメント・プロジェクトである。参加学生は現地の学生や講師とともに市場ニーズ予想・調査をして買出しを行い、自分たちの力で運営、撤収、利益計算まで手がける。日本人学生参加者が意見を出し、現地の学生や講師、児童養護施設の児童、貧困地域の人々と協力し合いながら作り上げるこれらのプログラムは、言語学習、異文化理解、コミュニケーション力向上など特色豊かなプロジェクト型学習といえる。

2 短期語学留学、及びフィリピン短期語学留学の先行研究

大学からの単位取得可能な短期語学留学に関する研究は、アメリカ、カナダ、オーストラリアなど英語を母語とする地域での研究が多く見られた。近年、距離や時差などの負担が少なく留学費用が安価であることから東南アジア諸国への留学が増加し、特に英語を公用語としているフィリピンへの短期留学は企業研修や中学高校の留学先としてテレビで⁴⁾紹介されるほど急増したが、フィリピンやマレーシアなど非母語圏への語学留学に関する調査は少ない。その中で倉増（2014）はフィリピン・セブ島での大学主催の語学留学参加者を対象にし

た調査を行った。その結果、調査した全ての語学プログラムにおいて、全般にプログラム全体への参加者の評価は高く、特に現地の語学学校や講師に対しての満足度が高かった。また TOEIC のリスニングスコアの向上が確認され、フィリピンへの留学において効果的な語学留学が出来ることを示した。

中平（2007）は、カナダでの短期留学に参加した 11 名に質問紙・インタビューでの調査を行った。短期留学を通じて参加者が第二言語を使用する際の自信の増加と不安の減少、コミュニケーションへの情動が変化したこと、参加者の大学入学以前のホームステイの経験の有無が英語使用の自信に影響したことを観察し、異文化交流は言語習得に効果が高く、異文化交流、異文化理解と言語学習は相互に影響することを明らかにした。

中川（2009）は、異文化コミュニケーション教育の観点から学習意欲について研究した。短期留学の参加者 20 名中 8 名に PAC 分析、インタビュー調査を行い、その中から 3 名に特化して更に分析し、参加者が様々な「気づき」を獲得したことを明らかにし、そして文化的認知と情動変化や気づきも学習意欲に関係していることを指摘した。

また、中山（2015）は、イギリスにおいて短期留学参加者の学習動機付け変化の質的調査をするためライアンの動機付けに関する質問用紙とドルニエイ・オットーの理論枠組みをふまえて、事前・中間・事後のインタビュー調査を実施した。8 名のインタビュー候補者から 4 名を選び、2 つのグループに分けた。語学力の高いグループの対象者の一人はホストファミリーとの関わりを深めたが、現地生徒とあまり関わらなかったことを悔いていたことなど、様々な情動的要因が学習動機付けの変容に関わっていることを明らかにした。

また、若生（2014）は、留学後就職した韓国人と日本人の短期留学経験者 3 名に対して、約 3～5 年前の留学経験の振り返りによるインタビュー調査を行った。短期留学の動機付けについてはデシの自己決定理論による動機付け、及びガードナーとランバートによる統合的動機付けと道具的動機付け理論を枠組みとして用い、留学の実態、留学の動機付けとキャリアパスへの効果・影響について考察した。その結果、動機付けの段階では道具的動機付け（統合的調整、同一化的調整）や内発的動機付けなどの差異が見られ、外国語能力の習得や向上が留学の共通の動機付けであった。留学の成果については、ある程度の達成感が共通点であった。キャリアパスについて、韓国人元留学生は留学が語学力の証明になり就職活動が有利になったと証言し、日本人の対象者は留学体験や語学力よりも、留学を通しての成長過程が就職活動で重視されるなど様々な動機付けとの関連性を明らかにした。

短期留学における言語習得と異文化交流、異文化理解の相互作用、文化、情動、気づき、動機付けとキャリアパスについての研究などが行われてきたが、短期留学における動機付け自体の変容を調べることは希有であり、意義があると思われる。次に、本研究の理論的枠組みとして異文化理解と異文化適応、動機付けについて言及する。

3 理論的な枠組み

3.1 異文化理解の概念及び異文化適応

異文化理解について 21 世紀は多文化社会だと言われる。八代・山本 (2006) によれば人間関係力には自己受容・自信、感情整理・判断保留、創造性・多面的思考、自立・責任感、オープンな心と柔軟性、そしてコミュニケーション力が必要である。當作・中野 (2013) は、「外国語学習のめやす」において「自己の発見」「他者の発見」「つながりの実現」を理念とし、「人間形成とグローバル社会を生き抜く力の育成」を目標としたが、「つながり」は個々の違いを理解した上でコミュニケーションの本質となる人間関係力と言える。それは異文化理解、つながりを通じて 21 世紀型社会を生き抜く力を養成するということである。

異文化理解と合わせて、短期留学では実際の異文化適応が重要となってくる。異文化適応には異文化での心理状態と時系列を軸とした段階モデルがある (八代・町・小池・吉田、2012)。このプロセスでは、第一段階を異文化との接触、第二段階を自己崩壊、第三段階を自己再統合、第四段階を自律、第五段階を独立と分類している。異文化理解の過程において、塩澤・吉川・石川 (2010) も学習意欲をそぐような痛みと主体的な行動を伴う自己変容を達成しようとする際に、「自文化を含めて文化の多様性を理解し、共存への覚悟を決めない限り、不適応を起こして辛い留学生活になり極端な場合は精神的な病気や途中帰国となりがねない」というリスクも指摘しているが、その過程自体もまさに異文化理解であるという共通認識がある。また、塩澤他 (2010) は異文化適応ステージについて、すべてがものめずらしいハネムーンの第一期、カルチャーショック・ストレスの第二期を経て、第三の適応ステージに進む際に、第三期直前の不安と緊張感の残る段階が最も大きな動機付けを提供しているのかもしれないと指摘する。八代他 (2012) の「自己崩壊」段階や塩澤他 (2010) の「不適応」「不安と緊張感の残る」段階について、短期留学におけるこのような段階を明らかにした研究は散見されなかった。次に異文化理解、異文化適応と密接に関係する動機付けについての理論を紹介する。

3.2 動機付けについて

本研究では、動機付けの定義について以下の 2 つの動機付け理論的枠組みを参考とした⁵⁾。欲求論的アプローチに基づく研究の中で、デシとライアン (1985) の提唱した「自己決定理論」は内発的動機付けと外発的動機付け論を展開している。内発的動機付けは、人間には生来能力を発揮したいという有能感 (注：内発①)、自分の意見で自律的に自分の行動を選択したいという自己決定性 (注：内発②)、人々と関わりを持ちたいという関係性 (注：内発③) の 3 つの欲求が関わり (デシとフラスト、1999)、やること自体が目標、面白いからやる、楽しいからやるといった内発的調整である。一方、外発的動機付けは自己決定性 (他律・自律) の度合いにより分類できる。強制されて行う外的動機付け (注：外発①)、不安だからやるといった取り入的調整 (注：外発②)、楽しくはないが重要だからやるといった

同一化的調整（注：外発③）、さらには無理ではなく自然と自分にとって大切なことだからやるといった統合的動機付けのレベル（注：外発④）が展開する。

第二言語教育においては、ガードナー他（1997）が統合的動機付けと道具的動機付けについて理論を展開している。統合的動機付け（注：統合①）は目標言語を話す集団の中に社会的文化的あるいは精神的に溶け込みたい、そのことを通じて自分自身を成長させたいという、その言語を話す人や文化に好意を持っている学習者が学習する場合を言う。例えば、「その言葉を使う人々の文化や価値観が理解できるから」「より多くの人とコミュニケーションできるから」という理由で学習する場合がこれにあたる。道具的動機付け（注：道具①）は、社会的地位を得たい、試験に合格したいといったように、ある目標を達成する手段として学習する場合を言う。例えば、「より良い会社に就職したいから」また「教養のある人間になりたいから」という理由で実利的に学習する場合がこれにあたる。

また、動機付けにおける感情の要素については、速水（2012）の学習動機付けを参考にした。学習動機付けに関係の深い気づきややる気について、速水（2012）は「目標に向かって何らかの行動を引き起こし、目標到達に向かわせる力」とであると定義づけている。そして、内発的動機付けとは「やること自体が目的でなされるときやる気」（注：内的やる気①）であり、外発的動機付けとは「その行動が手段的になされるときやる気」（注：外的やる気①）である。速水（2012）は学習理由における尺度を構築し、基本的には自己決定の高い動機付けを持つ程学習が促進され、望ましい行動が導かれると考えた。他の動機付け理論について「快感情を伴いやすい内発的動機付けばかりに目がいきやすいが現実の生活の多くを占める活動に外発的動機付けが機能していることをもっと考慮すべきである」とし、動機付け理論では1つの構成要素と見られて排除されてきた感情について、ネガティブな情動も次への推進力として上位にくることを指摘した。

これらの理論的枠組を参考にして本研究課題を述べる。

4 研究課題

本研究の課題は以下の通りである。

研究課題1：事前段階・中間過程・事後段階の異文化理解と学習動機付けがどのように変容したのかを観察すること

研究課題2：研究課題1の変容に関して語学能力差のある学生がどのように異文化理解、学習動機付けについて変容したのかも明らかにすること

4.1 研究対象者

本大学からのプログラム調査対象者⁶⁾7名に事前研修初日に Cambridge English Language Assessment テスト (CELA)⁷⁾を実施した。そのうち成績が順に上位層、中位層、下位層であった3名 (A、B、C) を研究対象者として抽出した。

対象者は3名とも男性で経営経済学部所属、18歳から21歳である。Aはプログラム以前の海外経験はないが、英語スコアは上位、Bは幼少期に海外経験があり、英語スコアは中位、Cは海外経験はなく、英語スコアは下位だった。

表1 調査対象者内訳

対象者	性別	所属	年齢	海外渡航経験	語学力
A	男	経営経済学部	18	なし	参加者の中で上位層
B	男	経営経済学部	20	あり	参加者の中で中位層
C	男	経営経済学部	21	なし	参加者の中で下位層

4.2 研究方法

本研究では言葉の重み、メモに重点を置き、個々がどのように変容したのかを質的に明らかにする。研究方法は Charmaz (2006) の「グラウンデッド・セオリー」を参考にし、データ収集は、インタビュー、留学中の日誌であるジャーナル⁸⁾からのメモ書き、授業及びそれぞれのイベントやプロジェクトの同行から観察されたメモ書き(覚え書き)の3つを行った。研究対象者の事前段階での英語力測定には CELA のデータを使用した。調査ではビデオ、ICレコーダーを使用したインタビュー、留学中のジャーナルからのメモ書き、そして授業観察、及びプロジェクト、イベントへの同行からのメモ書きを用いた。インタビューの逐語録、またジャーナルからのメモ書き、そして授業及びイベント、プロジェクト同行をもとにしたメモ書きを生データとした。データ収集において複数のデータを用いたので妥当性はあると思われる。研究協力者と総合的に全体のダイアグラムを描き、初期のコード化、焦点化のためのコード化、理論へのコード化を行う分析プロセスの後、全容を浮き上がらせて考察した。筆者の一人は日本からの単位認定者であり現地での授業の補助的サポート、ジャーナル回収、安全面配慮、写真記録などを行った。留学日程の11日間に加えて、事前の留学説明会2日間、事前研修3日間の計16日間同行し、本調査では参与観察者として関わった。もう一人の筆者は研究計画とプログラム実施後の分析をともにを行った。

4.2.1 インタビュー・質問項目

インタビュー調査は各研究対象者に対し、留学事前段階、中間過程、そして留学プログラム終了段階(事後段階)に行った。事前インタビューと事後インタビューは一回につき30～60分、中間インタビューは約10分程度であった。無理に発話させずにオープンエンドによる半構造化インタビューを実施した。

インタビュー質問項目については、動機付けに関わりが深いと思われる3つの項目を設定した。①言語学習への意識、取り組み、②異文化理解への意識、姿勢、③人々との交流についての意識、姿勢である。インタビュー時に観察された言葉の間の取り方、沈黙、表情など

非言語コミュニケーションについても観察した。

表2 インタビュー質問項目

事前	①言語学習への意識、取り組みに関する質問 大学の授業の中で好きな講義／英語への意識／理由／英語学習の意味について／英語学習の理由／英語学習を開始した年齢／中学高校時代の英語学習への意識／内容／取り組み方／だれの影響が大きい／英語の学習で大切なのはなにか／現在の英語学習への意識／取り組み方 ②異文化理解への意識、姿勢に関する質問 プログラム参加理由／最終的に決定した要素は何か、海外、単位、就活、語学力、興味など／このプログラムの後に得たいもの ③人々との交流への意識、取り組みに関する質問 出会う人々との交流について／現在の心境／ネガティブな感情はあるか／内容
中間	①言語学習への意識、取り組みに関する質問 プログラム、レッスン、英語学習について／現在の意識、取り組み ②異文化理解への意識、姿勢に関する質問 現地について気がついたこと、大変だったこと、うれしかったことなど／プロジェクトについて／現時点の抱負 ③人々との交流への意識、取り組みに関する質問 現在の心境／日本人学生、現地学生、現地講師、現地の人々との交流／今の抱負
事後	①言語学習への意識、取り組みに関する質問 プログラム、レッスン、英語学習について／現在の意識、取り組み ②異文化理解への意識、姿勢に関する質問 大変だったこと、うれしかったことなど／プロジェクト、イベントについて／現時点の抱負／このプログラムのポイント、特徴、おすすめ点など ③人々との交流への意識、取り組みに関する質問 現在の心境／日本人学生、現地学生、現地講師、現地の人々との交流／今の抱負

4.2.2 留学中のジャーナルからのメモ書き（ジャーナルからのメモ書き）

プログラム参加者には11日間のうち9日間、ジャーナル（日誌）の提出が課せられた。ジャーナルはその日の振り返りと内省、次の日への抱負を自覚させるためのものである。それをもとに重要と思われることをメモ書きした。

4.2.3 授業及びイベントやプロジェクト同行からのメモ書き（同行からのメモ書き）

調査中、筆者の一人は参与観察者として毎日の授業及びイベント、プロジェクトに同行し研究対象者の社会的プロセスや心理プロセスを観察してメモを取った。

4.3 調査期間

事前の語学力調査は事前研修初日（8月7日）に実施した。インタビュー調査は短期留学前の8月18日に事前インタビュー、プログラム終了後の（翌日は早朝に現地を出発したため）9月10日に事後インタビューを行った。また、研修中盤の自然体験学習日のプログラム終了後にも時間設定をすることが出来たので、急遽10分程度の間インタビューを行った。また

授業及びイベント、プロジェクト同行からのメモ書きは短期留学プログラム期間である8月27日から9月6日まで実施した。

5 個々の結果と分析

計9回のインタビューと2種類のメモを参考にしつつ、異文化理解、学習動機付けに関してどのような気づきや、やる気が見られたのかを分析した。初期コードから焦点化、軸足コード化プロセスの際に「言語学習」「異文化理解」「人々との交流」という3つの項目にカテゴリー化し、それを手がかりに変容の検討を行った。学習動機付けは人間の心の中の内面的な問題であるが、非言語コミュニケーションである表情、身振り、沈黙、及びジャーナルからのメモ書きや、同行して参与観察された対象者と現地学生、講師、日本人学生とのエピソードのメモ書き（同行からのメモ書き）も記述した。

表3から表11において、動機付けと関連のある言葉に下線を引き、ジャーナルや同行からのメモ書き、及び補足説明は（括弧）で表記した。速水（2012）とデシとライアン（1985）、デシとフラスト（1999）、ガードナー他（1997）の動機付けの枠組みを参考にしながら分析することで動機付けの複眼的な理解（上淵、2004）に努めた。動機付けの種類（括弧）には3.2で説明した動機付け理論の分類を示した。また種類分けが複数に及ぶものや、判別出来ない動機付けはそのように表記した。

5.1 参加者 A のケース

5.1.1 参加者 A の事前段階の結果

表 3 参加者 A の事前インタビュー及びメモ書き

言語学習	英語が好き／小学校から公文の英語／中学高校を通して文法も得意 小さな頃から洋画や海外ドラマに親しんでいる <u>資格や就職のためにも必要、将来の仕事でも英語を使いたい（姿勢を正した）</u> <u>海外旅行でも英語は大事／英語でコミュニケーションをしたい</u> 英語学習は何のためにしているのかを理解して楽しみながらするべき（何度もうなづいていた）
異文化理解	知識欲、（沈黙）なんでもやりたい／長期留学の前に海外への理解をしたい <u>世界の文化に興味、考え方の差や自己責任の概念、価値観など、また日本人の本音と建前に対して、（沈黙）ほら、外国人の裏表のなさを勉強したい（うなづく）</u> 衛生面は心配である 家訓として知らないふりをするよりは、やっちゃった方がいい（数回うなづく）
人々との交流	高校、今までも国際交流をしてきたが <u>価値観の広がり、文化の相互理解をしたい</u> <u>外国人と仲良くゲームがしたい（大きくうなづく）</u> <u>現地の先生と会いたい、テレビ電話による英会話授業を履修して仲が良かった／お土産も迷う</u> <u>つながりのためにも単語など頑張りたい、海外の友人も作りたい</u> 日本史が得意なので自分の先祖のことも含めて <u>自国のことを伝えたい（姿勢を正した）</u>

A は参加者の中で CELA テストが上位の成績だった。事前研修でも留学プログラムの企画について積極的に意見を出していた。英語は「資格や就職のためにも必要」「将来の仕事でも使いたい」という発言は道具的動機付け（道具①）、また同一化的調整（外発③）と解釈した。また、「英語でコミュニケーションをしたい」「現地の先生と会いたい」「外国人と仲良くゲームがしたい」というのは一緒に楽しみたいという温かい人間関係のための内発的調整（内発③）と受け取られた。また、長期留学の準備として短期留学に参加して、文化の相互理解をしたいという手段的なやる気（外的やる気①）が見られた。

5.1.2 参加者 A の中間段階の結果

表 4 参加者 A の中間インタビュー及びメモ書き

言語学習	英語が聞き取れるようになってきた 話すときに、英語で伝えるときにつっかえることへのもどかしさがある（まゆをひそめた） <u>聞くだけってよりは自分の考えを伝えることをもっと勉強したい</u>
異文化理解	環境が違うので刺激的、トイレとか、シャワー、（沈黙）エアコンも大変だった（口をゆがめた） 慣れてきた（大きくうなづく）
人々との交流	（仲間との交流はという質問に対して）楽しい（短い沈黙）です

A は仲間と交流する様子がしばしば見られるようになり、感情表現の分かりやすい表情（まゆをひそめる等）の増加も観察された。話すときに「聞き取れるようになってきた」が「伝えるもどかしさ」を感じており、「聞くだけってよりは自分の考えを伝えることをもっと勉強したい」という発言は、無理することなく大切だからしたいという統合的調整（外発④）と受け取れた。「つっかえることへのもどかしさ」という言葉からはネガティブな感情が受け取れた。また「トイレ、シャワー、エアコン」など（の様式の違い）への戸惑いなどが見られたが、同時に「もう慣れた」という受容も表現していた⁹⁾。

5.1.3 参加者 A の事後段階の結果

表 5 参加者 A の事後インタビュー及びメモ書き

言語学習	勉強しやすい環境を作る仲間たち、仲良くなった人ともっと詳しくしゃべりたい、簡単にではなく自分のことを英語できちんと伝えたい 最初は語学力や就活への道具という位置づけだったが、英語が使えてめちゃ楽しいという感情を持った現地学生にはじめは聞き返されるだけでショックだったが（沈黙）日々語学力が改善して卓球のラリーのようにできるようになった
異文化理解	最初は話せないで現地の人とプロジェクトなど出来るのか心配だった（沈黙）けど、日本人学生同士の協力で出来た、喜びというか（沈黙） 語学力だけでなく人間的に成長できた。いろいろと話しているうちに、もっとオープンになっていいのかなと（沈黙）。お互いに成長した（うなづく）。地域の子供たちとも、英語の出来ない子たちともボディランゲージと一緒にゲームやだっこしたりと気持ちがほっこりした／スポーツで自分が足をひっぱるのではと心配したが（一瞬下を向いた）気を使ってくれてありがたかった 仕事のために勉強するのではなく本当のコミュニケーションのためにもっと、（長い沈黙）同じ人間だから、笑いながらコミュニケーションがとれて楽しいよ、という気持ちを伝えるとなんかいい気分になって／お互いに成長できるという考えに共感して。自分の思いを伝えて（沈黙） 異文化コミュニケーションではお互いの文化を受け入れ協力し合って／笑顔をもとに受け入れ合わない（沈黙）本当の異文化コミュニケーションにならない。インターナショナルシチズンになりたい 毎日が3週間ぐらいいる濃さだったので最高だった（大きくうなづく） 帰国したらお茶漬けを食べたい／味付けが甘いのに飽きたが（沈黙）文化面でいやに思うことはひとつもない／市場も活気があって日本ではあり得ない感じでよかった このプログラムについて後輩に伝えたいのは、語学の勉強だけではなくて自分のパーソナリティを一変させたい／もっとオープンになれる自分になりたい／周りから少し誤解されやすい人はぜひ参加するとい（大きくうなづく）
人々との交流	現地の人との交流も格段に反応スピードが上がり／コミュニケーションが大事だとわかった 現地人講師の先生とも身の上話も本気で聞いてくれて、一緒に考えてくれる存在がいると思うと気が楽になって現地の人たちとのコミュニケーションも出来るようになった 仲間のおかげで全く違うタイプの学生、他大学の人たちとも仲良くなって、勉強でも高め合えた

言語学習に対して A は「はじめは英語を聞き返されてショック」だったが「日々語学力が改善して」「もっと詳しくしゃべりたい、きちんと自分のことを伝えたい」という自律的動機（内発的動機か外発的動機かは判別不明）が見られた。他大学の日本人学生たちとの交流も深まり、また現地の講師、学生たちとの英会話が「卓球のラリーのように」上達したと語った。そして「仕事のために勉強するのではなく本当のコミュニケーションのためにもっと、同じ人間だから、笑いながらコミュニケーションがとれて楽しいよという気持ちを伝えると、なんかいい気分になってお互いに成長出来る」と言及した。また「英語が使えてめちゃ楽しい」という、やること自体が楽しい、望ましいというチクセントミハイ（2001）のフローが見られた。フローの概念とは人間がそのときしていることに、完全に没入し、精力的に集中している感覚に特徴づけられ、完全にのめり込んでいて、その過程が活発さにおいて成功しているような活動における、精神的な状態をいう。また、「気持ちがほっこりした」「喜びと

うか」「もっとオープンになっていいのかな」と気がつき、「お互いに成長」して、「自分のパーソナリティを一変させたい」人に（プログラムを）勧めたいという発言からは自律的な動機付け（内発的動機か外発的動機か判別不明）が伺われる。そして、「全く違うタイプの学生」とも仲良くなれて「人間的に成長」して「同じ人間だから、笑いながら」「共感」「受け入れ協力し合って」「インターナショナルシチズンになりたい」という社会的・文化的・精神的に成長したいという統合的動機付け（統合①）が見られた。「濃度の濃い」「最高」の日々だったとの表現は自己肯定感、満足感が伺える。「いやに思う文化面はひとつもなかった」「自分自身の性格もオープンになった」という発言は、八代他（2006）のいう「オープンな心と柔軟性」の段階かもしれない。

5.1.4 参加者 A の総合的結果と分析

A の場合は事前段階に道具的動機付け・温かい人間関係のための内発的動機付けが見られたが、その中間過程で「伝わらないもどかしさ」を経験した後に内発的動機付け、自分の考えを伝えたいための同一化的調整となった。事後段階には英語を使うこと自体が楽しいというフローの有能感を持った。そして「本当のコミュニケーション」のために「同じ人間だからお互いに成長したい」「インターナショナルシチズンになりたい」という統合的動機付けへの変容が見られた。異文化理解では環境や食べ物などに対しての戸惑い、自文化との比較も見られたが「文化面でいやに思うところはひとつもない」と相手の文化を受容した。

5.2 参加者 B のケース

5.2.1 参加者 B の事前インタビュー及び同行からのメモ書きの結果

表 6 参加者 B の事前インタビュー及びメモ書き

言語学習	英語自体は好きだが得意ではない／留学している友達の影響で英語をちゃんと勉強したい 英語は小さい頃から接してきたし家族もみんな英語が出来るんです、うち（沈黙） <u>日常会話が出来るようになりたい</u> 中高は、決められた範囲をやる、テストのための勉強っていう／文法等を理解したいと本気で思ったのは大学に入ってから／英語学習で大切なのは文法よりも単語 海外旅行で役立つ／仕事でも外人と接するときに役立つ <u>プログラム後は英語がちゃんと出来ているようになりたい／出来れば米国の公認会計士をめざしたい</u>
異文化理解	一番見たいのは日本と違う景色 <u>予想したことのない、新しい経験をしたい／いろいろなものにふれあってみたい</u> 英語力がなくてもどこまで通用するか知りたい（沈黙）<u>親なしで自分だけの力試しがしたい</u> <u>JICA などの国際協力に興味があるので日本と現地との関係や違いについて学びたい（うなづく）</u> <u>日本はいいと言われるがどの程度の違いか体感したい</u> 衛生面等（への不安） 日本人は礼儀正しすぎてちょっとしたことでも謝るっていうか（首を振る） <u>礼儀正しさがありつつも異文化に触れて柔軟な考え方の出来る自分になりたい（うなづく）</u> <u>初対面の人への緊張はあるが積極的に話しかけていきたい／心も成長したい</u> <u>あと、日本がどういうところかも教えたい</u>
人々との交流	コミュニケーションっていうか（沈黙）

B は CELA テストでは中間の成績だったが事前研修時も英語学習に対して個別に質問をするなど積極的に取り組む姿勢を持ち、家族も英語を話すためその影響で英語学習に前向きだった。「留学している友達や家族の影響でちゃんと勉強したい」という外的動機付け（外発③）が見られ、日常会話が話せるようになりたいという有能感への内的動機づけ（内発①）や、できればアメリカの資格試験も目指し海外旅行や仕事や外国人と話すときに役立てたいという手段的な道具的動機付け（道具①）が見られた。「日本と違う景色が見たい」という異文化への興味を持ち、「自分だけでの力試し」「日本を外側から見ることを通じて自分自身の性格や心を柔軟なものにしていきたい」という自己決定に関わる内的動機付け（内発②）を持っていた。

5.2.2 参加者 B の中間過程インタビュー及びジャーナルの結果

表 7 参加者 B の中間インタビュー及びメモ書き

言語学習	伝えたいことを伝えられなくて本当に悔しい／その人を目の前にしたら文法事項で頭が混乱してしまう 勉強は参考書をしている（沈黙）あとは学生同士借りている／ 勉強方法がどうやったらいいか／分からない（沈黙）活用できていない でも（沈黙）言いたいことを言えなくても英語を間違っても（首を振る）笑ってくれて、失敗してもそれほど気にすることではないと思えた／それで安心した（うなづく）
異文化理解	楽しいが（沈黙）眠い（うなづく） 日本とは違う景色をたくさん見られた（うなづく） トイレとか、エアコン／ホテルの部屋／虫、ウワー、なにコレって（首を振る） 仕方ない
人々との交流	自分に自信がなかった／違うと思われたくなかった／最初は近寄ってきてほしくないと思った（下を向く） 少しずつでも英語を話して協力して <u>チームに貢献して積極的に話しかけて（プロジェクトを）成功させたい</u> ／友達、現地の人、みんなやさしい（大きくうなづく）／共通点を見つけながら親しく接してくれるのがとてもうれしい

中間インタビューにおいて B は、英語を使用しなくては意思疎通ができない現地の学生や講師陣に対して「近寄ってきてほしくないと思った」「伝えたいことを伝えられなくて本当に悔しい」「その人を目の前にしたら文法事項で頭が混乱してしまう」「勉強方法を活用出来ていない」など、ネガティブな感情を表現した。

しかし「学生同士参考書を貸し」（借り）して、「言いたいことを言えなくても、英語を間違っても笑ってくれて、失敗してもそれほど気にすることではないと思えた」「それで安心した」という気づきと気持ちの変化を表現した。「少しずつでも英語を話して協力してチームに貢献して」「（プロジェクトを）成功させたい」という発言は外発的動機付け（外発③もしくは外発④）と受け止めた。日本人学生との助け合い、現地の学生たちとのコミュニケーションが増加し、またコミュニケーションに身振りや表情、言葉の抑揚などの表現方法の多様化が観察された。始めはカルチャーショック（塩澤他、2010）を受けたトイレ、エアコン、ホテルの部屋にもだんだんと慣れてきたと発言した⁹⁾。

5.2.3 参加者Bの事後インタビュー及びジャーナルの結果

表8 参加者Bの事後インタビュー及びメモ書き

言語学習	英語は最初のうちは話しかけられたら答えられたりしないなと思っていた／直感で受け答えた今は少し理解できてスムーズに言えるようになった／勉強した単語をすぐに活用して相手に通じるとすごうれしくて上達していると思った。(沈黙) 今後ももっとこういうことに関わって行きたい 英語の勉強でもチームワークでいろいろな部分を個々で高められる基礎ができてうれしい (うなづく) 今後は授業で英語に関するものを取りたい (姿勢を正した)。個人的に本を買ったら三度読むなど実践する。ホームステイも予定しているのがつつり (うなづく) やりたい。フェイスブックを活用して質問もしたい／あとは聞き取り能力を高めたいのでCDを買いたい 英語が (沈黙) 本当に楽しすぎるので、参加してその授業を取る以上に、活用したい
異文化理解	勉強も含めて、現地での嗅覚など衝撃だった。正直こみあげてくるものがあったが (沈黙) それがその人たちの現実だということがわかった 現実を見て哀れむことはないが、自分たち日本人には何か出来ることがあるんじゃないかと思った (うなづく) /日本とは違う別の風景が見える 衛生面では正直最初無理だと思った (首を振る) /長い虫がいたり (沈黙)、シャワーも冷たかった。現地の人を正してあげたい訳ではないが (沈黙) <u>こういう生活、日本のようなものもあるんだって伝えたい。</u> 普通なことが普通じゃないことに (うなづく) /気がついたことや、<u>悪い環境を変えたい (沈黙)</u> 英語は二の次ではないが、(沈黙) <u>そういうところから変えたい。(沈黙) 必要最低限でもきれいにしたい。</u> で、(沈黙) <u>それを伝えるためにも英語も勉強しなくてはいけない。そういうことを伝えるために環境問題等現地の理解や観察をしたい</u> 自分にとっては、古着の回収 (プロジェクト) など、(沈黙) たかが服だけどされど服 (うなづく)、なんですよ <u>日本に帰ったら日本の方がいいなと思うかもしれないが、それも覚悟の上で切磋琢磨して頑張ってインタビューで (再度) 来たい</u>
人々との交流	仲良し友達を作りにきた訳ではなかったけど、いい仲間が出来てうれしい (うなづく) 現地の人に言われて、空を見たらわたしのことを思い出してね、頑張れるはずだからと言われて (沈黙)、<u>小さな一歩でも自分に出来ることを積み重ねて行きたい</u> 他大学の人も気後れしてしまう人や年上の学生にも話してお互いに仲良くなれた。話してみれば面白いし、みんなまじめ、勉強だけではないんだ。自分の偏見だった。<u>みんなで変えてあげたい。くだらないことで笑い合える笑顔がすてきだと思う／共感してもらって、一緒に出来ることがあれば一緒にやっていきたい (数回うなづく)</u> いろいろな話をする事で (両手で輪を描く) 固かったものがやわらかいものになってとても暖かい人たちだと思った／今回見た環境を周りにも伝えてあげたい 今は寂しくて帰りたくない (首をゆっくり振る)、みんなのことが好き／共感してくれて、理解してくれてなくても聞いてくれる、真剣に考えてくれる、ずっと一緒にいたのでただの友達よりも濃いけどまた再会すると決意しているし／ (沈黙) そこからまた話が出来ることを (沈黙) 感謝している (うなづく) 負い目を見せても普通に接してくれて、相手に知ってもらえる、自分のことも理解してもらえて話さないと理解されないんだと日本人は友達が出来ると不安になるだろうが、心配することはない

Bは「最初は話しかけられたら直感で答えていたが今は少し理解出来てスムーズに言えるようになった」と英語力向上を認識し、習ったことを「すぐに使って伝わるとすごうれしくて上達していると思った、もっとこういうことに関わって行きたい」「うれしい」「本当に英語が楽しすぎて、頑張っている自分を認めて自信もついた」と有能感 (チクセントミハイ、2001) も高めたようだ。「固かったものが柔らかいものになって温かい人たちだと思った、今回見た環境を周りに伝えたい」というのは温かい人間関係への内発的動機付け (内発

③) と受け取れた。

異文化理解については、Bはプログラムを通じて「違う景色」が「見たかった」。しかし、プロジェクトの一環として持参した古着が現地でリサイクルされる様子を見て、「たかが服、されど、服なんです」と発言したのは深い気づきがあったようである。また、衛生面について、「下水道がない、窓が壊れかけている」とか、現地の（スラム街の）人には、「仕方のない日常」に対しても「最初無理だ」と思った。しかし人々との交流の過程で「正してあげたい訳ではないが」「日本にいる自分たちに何ができるのか」「必要最低限でもきれいにしたいという、より良い環境作り」「それを伝えるために英語も勉強したい」「そのためにも現地の理解観察を深めたい」という、楽しくはないが重要だからやりたいという同一化的調整（外発③）、もしくは手段的やる気（速水、2012）を持った。

Bは、「仲良し友達を作りにきた訳ではなかったけど、いい仲間ができてうれしい」という人々との交流が出来た達成感を持った。そして「みんなで共感してもらって、一緒に出来ることがあれば一緒にやっていきたい」という温かい人間関係への内的動機づけ（内発③）を持ち、「日本に帰ったら日本の方がいいなと思うかもしれないがそれも覚悟の上で切磋琢磨して頑張って再度戻ってきたい」という、楽しくはないが重要だから、もしくは自然と大切だからしたいという外的動機（外発③もしくは④）も伺えた。「本当に楽しすぎる」という発言はやること自体が目的で快感情を伴うやる気（速水、2012）である。「みんなのことが好き、共感してくれて。理解してくれなくても聞いてくれる、真剣に考えてくれる、ずっと一緒にいたのでただの友達よりも濃いけど、また再会すると決意しているしそこからまた話が出来ることを感謝している、だから頑張りたい」という発言には、好意を持ちつつ社会的・文化的・精神的に溶け込みたい、成長したいという統合的動機付け（統合①）が見られた。

5.2.4 参加者Bの総合的分析

Bの場合は事前に自分だけの力試し、違う景色が見たい、英語を使って資格を取りたいという動機付けを持ち、中間過程に「近寄ってきてほしくない」「（うまく伝わらず）悔しい」などネガティブなステージとなり、事後には「固かったものが柔らかいものになった」「言いたいことを言えなくても（英語を）間違っても笑ってくれて、失敗してもそれほど気にすることではないと思えた、また再会すると決めている」という表現は八代他（2006）のいう自己受容・自信とも受け止められる。現実の自分を受け入れて適応ステージを上ったのかもしれない。また、笑いはかなり意図的に使い分けることができて微細な感情を表現するもの¹⁰⁾だが、大笑や嘲笑の意味ではなく、温かい感情であろうと会話やメモから推察された。「失敗してもそれほど気にすることではない」という表現に見られるように、第二言語を「スムーズに」使用しなくてはいけないというプレッシャーも弱まったようである。

また、「みんな共感」という温かい人間関係を深める一方で、「日本とは違う景色をたく

さん見て」、特に衛生面において衝撃を受け、「正直無理」と否定的になった時期もあったが、人々との交流を通じて、「なんとかしてあげたい」、相手（の貧困）をみんなでどうにか変えたい、人々との交流を通じて溶け込みたい、そのためにも英語学習をしたいという、更に深い統合的動機付けが明らかになった。

5.3 参加者 C のケース

5.3.1 参加者 C の事前インタビュー及び同行からのメモ書きの結果

表 9 参加者 C の事前インタビュー及びメモ書き

言語学習	経営学など知識として学ぶのは好きだが、(沈黙) 暗記は苦手で英語はどちらかというと苦手 中学から始まった英語は文法が全くわからず日本語と英語の語順の違いに戸惑い／単語等の暗記ができず、自習もしなかったが中学の先生のおかげで逃げ出さずに一応取り組む気持ちになった 英語学習で大切なことは(うなづく)、どの教科にも言えることだがやれと言われて強制的にやらされてもいい気がしない(うなづく) <u>自主的に勉強するようにやらせることが大事／海外留学等はそのためにやっぱりやらなきゃという気持ちになる機会を作っていて、自分自身で強制的に機会を作ってステップアップして行きたい</u> 就活や履歴書に使えるということはあまり考えていない／参加した後の抱負は英語学習の動機として今は認識しているが留学後も継続できるように、 <u>そこは自分次第なので努力したい／宿題課題には前向き英語を見かけると例えば缶コーヒーやTシャツなどの身近な英文はこまめに調べている</u> <u>海外に行くと英語は必需品／参加を決めているので自分を追い込み、成果を出せるよう頑張りたい</u>
異文化理解	先生からの声かけで(参加しようと思った)／日本と違う環境への興味 3年生という機会。来年は就活で出来ないし自分から海外へ行くとは思わないので人生でのいい機会 <u>日本と言えば安全、便利だと言われているが実際にはどうかという興味(沈黙)</u> 海外では治安面、衛生面、スラム街への不安があるが、行ってみないとわからない 不安な気持ちのほうが強い／英語は苦手だけどプロジェクト等への参加を頑張りたい／ <u>そのためにも英語をもっと学びたい</u>
人々との交流	言葉が通じないこと、コミュニケーションが取れないかもしれないことへの不安 <u>英語でのコミュニケーションができるように英語を頑張りたい</u> <u>コミュニケーションを取れるように英語学習を頑張る</u> 人生で大切なのは違う年代、考え方の人とのコミュニケーション／社会勉強ってバイトで知ったから／ <u>外国人とのコミュニケーションも大事／自分から話しかけたりするのは苦手だが仲良くなりたい</u> 英語が出来るようになって現地の人とのコミュニケーションはその場限りの気がする(沈黙) が、同行した(日本人の)学生たちとは仲良くなれると思う(うなづく)

C の CELA テストのスコアは下層であった。本人も、日本語と英語の語順の違いに戸惑い、スペルがわからないと言い、英語が通じないことでコミュニケーションが取れないことも不安に思っていた。しかし、講師(筆者)からの声かけや外国への興味、英語を使わざるを得ない環境に自らを置くことで英語を頑張ろうという外的調整(外発①)が伺えた。現地の衛生・治安面に対しても、「不安な気持ちの方が強い」が、「日本と違う環境への興味」「プロジェクトの参加を頑張りたい」という楽しくはないが重要だから、また「外国人とのコミュニケーションも大事」という同一化的調整(外発③)も見られた。「この機会を逃すと海

外に行くことが一生ないかもしれない」、現地の人たちと「コミュニケーションがとれるように英語を頑張りたい」という異文化理解への関心も見られた。

5.3.2 参加者Cの中間インタビュー及びジャーナルの結果

表 10 参加者Cの中間インタビュー及びメモ書き

言語学習	発言するときは、自分で英語で頭で考えないで単語だけ（沈黙） その日に学習した単語を使って文章を作って話しているのは自分の英語に成長を感じてうれしい（うなづく）
異文化理解	（このときは本人からは特に挙げなかったが一時期体調を崩した。このネガティブな体調の時期、Cは現地講師からの声かけ（C,are you all right?等）、同室の仲間からの声かけ（やっとかから、聞いてくね等）、現地学生からの声かけ（C-, hey-）をされて、はい、いいえ、やあ（Yes,No,Hi）と受け答えをしている場面がホテルの朝食会場、ロビーなどで数回見られた。）
人々との交流	その日のチェックイン（その日の始まりにみんなでシェアする）では、自分自身で英語で頭で考えながら分かりやすく（沈黙）思ったことを伝えようとか、しようと考えていると（沈黙）単語になってしまう（沈黙）／ 言葉がわからなくても（沈黙）ジェスチャーで通じたのかなって思う（うなづく） <u>分かるところはどんどん発言してわからないところはどんどん（コミュニケーションが）成功するようにしたい</u>

Cは「発言するときは自分で英語で頭で考えないで単語だけ」という自分の語学力への不満と同時に「その日に学習した単語を使って文章を作って話しているのは英語に成長を感じてうれしい」という達成感も感じていた。

中間インタビューの時期、Cは体調を崩してプログラム中にホテルに戻ることもしばしば観察されたが、ホテルのロビーや食堂で、講師や学生からの温かい気遣いや、声かけを受けている様子も観察された。またスポーツ大会や自然体験という共通の経験を通じて人々との交流を深める様子が見られた。もともと口数が多くはないCが英語でコミュニケーションをしようとしている時、現地の学生、講師が温かく見守り、理解しようと真剣に聞いている場面もよく見かけた。また周りの日本人学生も横からサポートしていた。英語の意思疎通にジェスチャー使用も増加し、「分かるところはどんどん発言してわからないところはどんどん（コミュニケーションが）成功するようにしたい」という英語学習への動機付け（判別不明）が芽生えたようであった。

5.3.3 参加者 C の事後インタビュー及びジャーナルの結果

表 11 参加者 C の事後インタビュー及びメモ書き

言語学習	英語がわからないというのは（沈黙）あまり勉強していないだけかも／自分から英会話等勉強すれば使いこなせるようになると思う 実際に英語だけを使う状況になって／すごく上達しているなというイメージがある <u>買った文法のテキストをやって、終わったら他のテキストも買うつもり（うなづく）</u> 英語を自分で使おうという気持ちがあふれてきた（うなづく） 留学後変わったという点は（沈黙）<u>英語に対する興味がわいた／苦手意識が少しなくなった／留学もできればしたい</u>
異文化理解	勉強も充実していて（うなづく）／最後のプロジェクトで成功できて最高潮だった／最後のジャパン・プロジェクトが一番楽しかった 大事、体調管理に気をつけること／慣れない食べ物や、エアコンが効き過ぎなことは覚悟した方がいい 基本的に甘いものが多い／衛生面も、おなか壊すとか、道を歩いていても水が流れていたり、犬がたくさんいたりとかは怖かった／食べ物もあまり合わなかった／コメとか（沈黙） この留学に来てよかった／もうちょっといたいとも思うが体調管理でそろそろ限界とも思う プログラムのおすすめ点は、英語が出来る出来ないではなくて（首を振る）、しっかり気持ちを伝えられる姿勢が出来る（うなづく）
人々との交流	みんなここまで仲良くなって（うなづく）もう最後だと思うと（沈黙）<u>もう少しいたいという気持ちが今はある（大きくうなづく）</u>／ 現地の子供たちとも普通に遊べたし（うなづく）、海外の人とのコミュニケーションも自分の中では満足コミュニケーションについては（沈黙）最初は聞き取るのがやっとなで聞き取れないことが多くて周りの学生に助けてもらったが（沈黙）自分の力だけでも理解できるように／少しずつなつてそれが留学してよかった（うなづく） 仲間はそれぞれ同じ考えもあって助け合いとか協力する姿勢とか（沈黙）互いのグループを手伝ったり、プロジェクトのダンスも共通の目的がありつつ留学が過ぎたからすごい充実感（大きくうなづく）／プロジェクトの内容ももう少し理解説明があったら現地の人、仲間ともっと仲良くなれた（沈黙） 初対面だった学生たちも明るくて面白い人たちが多かった（うなづく）これからも仲良くやっていけると思う。中盤での海での交流（自然体験）から一気に仲良くなった 現地の子供たちも元気でとてもかわいい／日本ではふれあう機会がないので 短期留学を一言で言うと現地の人とのコミュニケーションを計るのが一番大きかった。あと、仲間と現地の先生 現地の学生たちは始めは話が通じなかったが（沈黙）わからないところはゆっくり話してくれたり（うなづく）ちょっと文法が違っても頑張って聞いてくれる姿勢が良かった／すごく優しい／一緒に組めてよかった

言語学習について、C は「英語がわからないというのは、つまりはあまり勉強していないだけかも」と認識を変え、「自分から勉強したら使いこなせるようになるかも」という抱負を持ち、「英語を自分で使おうという気持ちがあふれてきた」という、やること自体が楽しい快感情（速水、2012）、そして、「（長期的に）留学したい」という意欲を持った。

異文化理解についてもプロジェクトの成功を通して達成感を持ち、「短期留学プログラムのおすすめ点は、英語が出来る、出来ないではなくて、しっかり気持ちを伝えられる姿勢が出来ることだ」という意思疎通の大切さを挙げた。

人々との交流については、英語での意思疎通に苦労したが学生同士の助け合い、プロジェ

クトやスポーツイベントなど「共通の目的」があつて協力しあえたことで「これからも仲良くやって行けると思う」と述べ、「現地の学生たちは始めは（当初は）話が通じなかったが、わからないところはゆっくり話してくれたりちょっと文法が違っても頑張って聞いてくれる姿勢が良かった。すごく優しい」という信頼感を持った。「来てよかった」「現地の人とコミュニケーションを計るのが一番大きかった」と述べ、「もう少ししたい気持ちが今はある」と、温かい人間関係への内的動機（内発③）を持った。

5.3.4 参加者 C の総合的結果と分析

C の場合は、事前段階では講師からの声かけや強制的に英語学習の環境を作るなどの他律的外発的動機付けと、仲良くなりたいなどの人間関係への動機付けが見られた。中間過程では、習った英語を使って理解されることで自分の英語向上を認識し、自己成長の認識が見られた。

また、体調不良な時期を経験し、そのネガティブな状況で様々な人々から気かけられ、声をかけられた体験などが現地や日本人同士の関わりを深めるきっかけにもなったようであった。しっかりと自分の気持ちを伝えられる姿勢の大切さにも気がついた。そして、事後段階には、語学力が向上し周りの人との温かい人間関係の中でプロジェクトの達成感、満足感を感じて「英語を自分で使おうという気持ちがあふれて」「（長期）留学したい」という内的動機を持った。しかし食べ物の違いなど異文化環境への違和感はぬぐえず、体調面では「そろそろ限界」な状況も認識していた。

6 考察

3 名の事例から、短期留学プログラムのような短い期間の滞在でも異文化理解と学習動機付けの変容が観察された。A は、事前段階に道具的動機付け・温かい人間関係のための内発的調整が見られたが、中間過程で「伝わらないもどかしさ」を経験した後に人々との交流を通じて、「英語が使えてめちゃ楽しい」という、英語を使うこと自体が楽しいというフローの有能感を持ち、内発的調整に加えて「インターナショナルシチズンになりたい」という異文化理解を深めて精神的に溶け込みたい、成長したいという統合的動機付けに変容した。

B は、事前段階に自己決定的、有能さへの内発的調整や道具的動機付け、同一化的調整を持っていたが、「近寄ってきてほしくない、悔しい」というネガティブな経験の後に「個々に高め合えて英語を使って一緒に変えていきたい」、国際協力にも取り組みたいという統合的動機付けに変容した。

C は、事前段階で講師からの声かけと学習動機付けのための参加という外発的動機と人間関係への内的動機付けを持っていたが、中間過程で体調不良を経験した。そのネガティブな状況での人々との関わりの中で「しっかりと自分の気持ちを伝える姿勢」の大切さに気がつき、プロジェクト等の達成感、人々との温かい交流などから「留学したい」という内的動

機付けへと変容した。

中間期に3名とも「悔しさ」「もどかしさ」、時には体調不良というネガティブな要因を持つ感情・事態を経験したが、その状況が人々との関わりの中で更に動機付けを促進させる影響を帯び、変容した。動機付けは内的・外的動機付け、または統合的・道具的動機付けに分類・固定しているものではなく、短期間でもダイナミックに変容していくことが明らかになった。

異文化理解について、Aは事前段階から異文化への興味が高かったが、中間過程で「(トイレなどの様式が)刺激的」と言った。その後現地の人々の住まいや生活を実際に体験し、理解が深まる過程で「オープンな心を持った国際人になりたい」というステージに上った。Bも異文化への興味が高く、「違う景色がみたい」と思っていたが「(衛生面など)衝撃的、正直無理」で「近寄ってきてほしくない」という葛藤も経験した。その後人々との交流が深まるにつれて、「日本人にできる支援を考えたい」という積極的なステージへと変容した。Cは「海外を一度は見てみたい」という事前段階から、中間過程で体調不良を経験し、その時に様々な人々からの温かい声がけを受けて「自分の気持ちを伝えることの大切さ」に気づき、事後段階には異文化理解をさらに深める機会を持ちたい、留学したいという動機付けに変容した。

語学力の差での「言語学習」「異文化理解」「人々との交流」の観点で動機付けを分析した結果、3つが複合的に関係していた。三者三様の異文化適応経緯も明らかになったが共通して、第1ステージとして異文化への接触・興味などへの強い「期待感」、第2ステージとして「現実との認識のギャップ」、第3ステージとして「現実の受容」、そして第4ステージとして「積極性」が明らかになった。今回においては参加者の満足度が高く、全員に語学学習、異文化理解、人々との交流、学習動機付けの前向きな変容が明らかになった。

学習は「適応的コンピテンス」を目指すものであり、単なる知識内容の発達よりも広義であり教える場も教室、学校という機関を超えてすべてにおいて学習が形成されるという認識が今日の主流である。中川(2009)の指摘するように、大学が主催する留学プログラムでは参加者にとって真の自律した学びはもたらされないという懸念はあるが、それでも短期間英語を話す環境に置かれることは参加者のやる気を喚起し語学学習のみならず異文化理解への前向きな動機付けに変容したことが明らかになった。グローバル時代に対応し、若者の動機付けを促進する短期留学プログラム推進を今後の課題として更に研究していきたい。

謝辞

本研究にあたりご協力いただきました学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

注

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構によれば 81,219 人となり対前年比では 11,350 人増加した。尚、英語教育の分野では APA Manual の様式に準じることが多く、かつ横書きの原稿であるため係数は算用数字を用いることとした。また、表記ゆれの「動機付け」「動機づけ」について、参考文献の著書名以外は「動機付け」で統一した。
- 2) シラバスによると、この集中講義の目的は「英語能力の向上はもとより英語学習の動機付けとしての学習意欲向上」である。また、「嘉悦大学の学生のみならず他大学の学生たちとの混成チームによる共同学習、生活を通じて自分たちの個性を発揮しつつ集団にどう貢献するかを常に意識することになり、現地で実際に英語を理解し、毎日使うことにより、更に英語学習への意欲が向上し、広い意味でのコミュニケーション力向上、異文化体験を通じて「世界を見る意識」や「英語学習への指針」が啓蒙される」ことを到達目標に掲げている。言い換えるならば、短期留学における語学能力の向上、学習動機付け、そして異文化理解の促進を主眼としている。プログラムの運営組織は児童養護施設やスラム街などで貧困により学習困難な状況に置かれている優秀な若者に奨学金を給付し、就学支援を行いつつ、現地での職業就労支援、並びにオンラインによる英会話学校運営を行っている。嘉悦大学においても春・秋学期を通じて英会話などの講義をテレビ電話を通じて実施しているため、留学参加者は担当講師の直接指導による英語授業を受講し、プロジェクトに参加することとなる。
- 3) 当該年度、スポーツ・フェスティバルでは 5 歳から 40 代までの約 200 人が参加した。ジャパン・フェスティバルはスラム街の職業就労支援施設の建設予定地で開催され、乳児を連れた母親から 10 人の孫がいる年配者まで幅広い層を取り込んだ約 400 人が参加する交流イベントとなった。過去には現地の商業施設にてファッションショーを開催したこともあり、2015 年度は盆踊りや射的など日本のお祭りの紹介と、現地でも人気の高い古着などのフリーマーケットを行った。
- 4) 2016 年 5 月 2 日「シブ 5 時」(NHK)「特集英会話の上達 いま注目の国とは？」より。フィリピンを特集し、公用語として英語が発達し、英語を母語とする人の英語と比べて発音などが日本人に聞き取りやすく、国策として日本人向け英語講師の養成にも力を入れていること、企業のみならず中学高校での短期留学も急増していることを紹介した。
- 5) 動機付けの種類についてはそれぞれ注釈(注：括弧)をつけた。後述の分析にも同注釈をつけることで引用を明確化した。
- 6) 短期留学プログラム参加者は他大学を合わせて 20 名だった。対象者には今回の調査研究の趣旨を説明し、単位取得に影響する成績とは無関係であること、研修前、研修後の 2 回の調査協力が可能なこと、研究結果は個人が特定されないように留意しつつ公表する可能性があることを伝えて調査依頼をした。結果、3 名とも前向きに調査協力を同意してくれた。調査前に「インタビュー同意書」を説明し、署名を得た。
- 7) 平成 26 年 10 月に文部科学省が発表した「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」ではコミュニケーション能力を重視し、CEFR(外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠)を目安としている。英語力測定方法には CEFR を指針とした非営利組織ケンブリッジ大学英語検定機構(Cambridge English Language Assessment)の「英語力レベルテスト」を使用した。
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)
(<http://www.cambridgeenglish.org/exams/>の General English for Schools)
- 8) 1.How do you feel now?,2.What did you learn today?,3.What challenges do you want to try tomorrow?,4.本日言いたかったけど言えなかった表現、よく聞いた表現だけど分からなかった言葉、本日の英語との関わりで気がついたこと、について 9 日間(プログラム初日と最終日を除く)回収した。
- 9) 現地のトイレについて、一流ホテルは別として普通のホテル、レストラン、商業施設、一般家庭などでは使用後にペーパーを流してはいけない。横にある屑入れに捨てなくてはならない習慣は下水事情の悪い途上国ではよく見られる様式なのであるが、短期留学して間もない頃、数人の学生がそのことを忘れて詰まらせ、困っていた(「詰まっちゃった」「キタない」)。シャワーについてはバスタブがない、湯に浸かれないことについて数人の学生が不満(「疲れが取れない」「フロにつかりてー」)を言っていた。また、エアコンについては、宿泊するホテルの部屋のエアコンが効かなかつたらしい。数人の学生が不平(「暑すぎ」)を言っていた(その後部屋は交換された)。途上国ではよく見られる状況だが、設定温度が低すぎたり、もしくは逆に効かなかつたりということがあった。舗装されていない道の水たまりや臭気、犬、ホテルの部屋にいた「長い虫」(「ウー、なにコレ」)にもそれぞれ拒否感、不安感を表したが次第に不平を言う学生は減り、「慣れてきた」「仕方ない」という言葉が増えた。食事面に関しては A と C は甘すぎる

- アイステイーや米の味の違いなどに最後まで戸惑っていた。Bは「全く嫌に思うところはない」と受容した。また、Cは「もうちょっとなんかとも思うが」「そろそろ限界かと思う」と発言した。
- 10) 『世界大百科事典 第2版』(平凡社、2006)より。「人間における感情表出の一つ。日本語における笑いにはさまざまなニュアンスが含まれており、その違いは、たとえば〈微笑〉〈苦笑〉〈冷笑〉〈大笑〉〈嬌笑〉〈嗤笑〉といったごとく形容詞を頭につけることによって表される。これに対して英語では、声をたてるかたてないかをおおまかな基準として laugh (笑い) と smile (ほほ笑い) の区別がある。上の例でいえば、前3者は smile、後3者は laugh の範疇に入る。」

参考文献

- [1] 上淵寿編著 (2004) 『動機づけ研究の最前線』北大路書房、pp.2, 25
- [2] OECD 教育研究革新センター (2013) 『学習の本質：研究の活用から実践へ』明石書店、pp.56-59, 234, 392-401
- [3] 倉増泰弘 (2014) 「セブ島における語学留学プログラムの構築」『梅光学院大学論集』(47)、梅光学院大学、pp.43-58
- [4] マーガレット・サンデルロウスキー著、谷津裕子、江藤裕之訳 (2013) 『質的研究をめぐる10のキーエスチョン』医学書院
- [5] 塩澤正、吉川寛、石川有香編集 (2010) 『英語教育と文化：異文化間コミュニケーション能力の養成(英語教育学大系 第3巻)』大修館書店、pp.26-30, 35-37, 39-42
- [6] キャシー・シャーマズ著、抱井尚子、末田清子訳 (2011) 『グラウンデッド・セオリーの構築』ナカニシヤ出版、pp.25, 51-80
- [7] 白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学：第二言語習得論とは何か』岩波書店
- [8] エドワード・デシ、リチャード・フラスト著、桜井茂男監訳 (1999) 『人を伸ばす力 内発と自律のすすめ』新曜社、p.290
- [9] 當作靖彦 (2013) 『NIPPON3.0 の処方箋』講談社、pp.22, 92
- [10] 當作靖彦、中野佳代子 (2013) 『外国語学習のめやす』公益財団法人国際文化フォーラム、p.22
- [11] 中川典子 (2009) 「短期海外語学研修における参加者の気づき—異文化コミュニケーション教育の観点から—」『流通科学大学論集』21 (2)、流通科学大学学術研究会、pp.38-40, 43, 50
- [12] 中平里美 (2007) 「短期留学が日本人英語学習者に与える影響—情意、動機付け、コミュニケーションの意思の変化—」『JACET 全国大会要綱』(46)、一般社団法人大学英語教育学会、pp.174-175
- [13] 中山麻美 (2013) 「Motivational Changes through Study Abroad Experience in the U.K.」『JACET 中部支部紀要』(11)、pp.63-76
- [14] 中山麻美 (2015) 「インタビューによる短期留学参加者の動機づけ変化の理解 Understanding Motivational Changes on Short-Term Study Abroad through Interviews」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』52 (1)、pp.41-68
- [15] 速水敏彦 (2012) 『感情的動機づけ理論の展開』ナカニシヤ出版、pp.1-11, 31-33, 69-72, 87-94, 119
- [16] M.チクセントミハイ著、今村浩明訳 (2001) 『楽しみの社会学』新思泉社、pp.19-22, 279
- [17] 八代京子、町恵理子、小池浩子、吉田友子 (2012) 『異文化トレーニング』三修社、pp.261-275
- [18] 八代京子、山本喜久江 (2006) 『多文化社会の人間関係力』三修社、p.9
- [19] 若生正和 (2014) 「短期留学生の留学動機づけと進路選択に関するインタビュー調査」『大阪教育大学紀要』62 (2)、pp.181-191
- [20] 渡部留美 (2009) 「短期海外研修プログラムにおける参加者の体験と意識変容：参加者に対するPAC分析の結果より」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』(13)、pp.14-30
- [21] Charmaz, Kathy. (2006) *Constructing Grounded Theory: A Practical Guide Through Qualitative Analysis*, Sage
- [22] Deci, E.L. & Ryan, R.M. (1985) *Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior*. New York. Plenum.
- [23] Deci, E.L. & Ryan, R.M. (2012) "Motivation, personality, and development within embedded social contexts: an overview of self-determination theory", *The Oxford Handbook of Human Motivation*, Oxford, pp.85-107
- [24] Dornyei, Zoltan. (2010) "The Relationship between Language Aptitude and Language Learning Motivation: Individual Differences from a Dynamic Systems Perspective", *Continuum Companion to Second Language Acquisition*, Bloomsbury Academic, pp.247-265
- [25] Gardner, R.C. & MacIntyre, P.P. (1997) "A student's contribution to second language learning Part 2",

資料1 プログラム構成（事前研修・短期留学・事後レポート）

日程	概要
事前研修1（英語力レベルテスト実施） 事前研修2（※）インタビュー実施 事前研修3（※）	現地情勢・習慣などの異文化理解、英会話指導、プロジェクト会議、ダンス練習、テレビ電話による現地講師との会議、参加者同士の交流など
プログラム 1日目 2日目 3日目 4日目 5日目（※）インタビュー実施 6日目 7日目 8日目 9日目 10日目（※）インタビュー実施 11日目	資料2
事後 レポート提出・面談	和文・もしくは英文レポート提出、フィードバック

資料2 留学プログラム中の日程

	Day1	Day2	Day3	Day4	Day5	Day6	Day7	Day8	Day9	Day10	Day11
	8月27日	8月28日	8月29日	8月30日	8月31日	9月1日	9月2日	9月3日	9月4日	9月5日	9月6日
9:00	※この日までに フィリピンセブに 到着して下さい。	チーム ビルディング	孤児院訪問	スポーツフェス ディバル	フィリピン祝日の ためデイオフ 自然体験学習日	英語レッスン	英語レッスン	英語レッスン	英語レッスン	準備	帰国日
10:00						WAKU JAPAN FESTIVAL					
11:00							ランチ	ランチ	ランチ	ランチ	
12:00											
13:00		フィリピン人の 暮らしを知るツ アー	孤児院の子ども とスポーツフェ スティバルに向 けて練習				WAKU JAPAN FESTIVALに 向けた出店 プロジェクト	WAKU JAPAN FESTIVALに 向けた出店 プロジェクト	WAKU JAPAN FESTIVALに 向けた出店 プロジェクト	WAKU JAPAN FESTIVAL 会場準備	
14:00											
15:00											
16:00											
17:00						WAKUWORK 6th Anniversary					
18:00											
19:00		ディナー	ディナー	ディナー	ディナー	ディナー	ディナー	ディナー	ディナー		
20:00		チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	チェックアウト	
21:00		※英語課題提出	※英語課題提出	※英語課題提出	※英語課題提出	※英語課題提出	※英語課題提出	※英語課題提出	※英語課題提出	※英語課題提出	

資料3 授業風景の様子



資料4 スポーツ・フェスティバルの様子



資料5 ジャパン・フェスティバルの様子



(平成28年5月9日受付、平成28年7月7日再受付)